

毛利元就の三本の矢の話

岩 下 紀 之

一

逸話の類は、有名なものであってもどんな典拠に基づくものか、思
いあたらないことがある。戦国大名毛利元就の三本の矢の話も、その
一例であつて、あまねく人の知る逸話ではあるけれども、いざその出
典はということになると、ふさわしい書物が見出せないのである。こ
の題材を研究するとなると、二つの方向からの追求が可能であろう。

一つは史的人物としての毛利元就をとりあげて、この話の真偽を明ら
かにする。もう一つは説話それ自体として検討するということになる。

まず歴史上の人物としての毛利元就は、何と言つても重要人物であ
るから、信頼できる伝記も多い。毛利家は長州の大名となり、子孫も
絶えなかつたので、史料も「毛利家文書」を始め、注意深く、敬意を
もって保存されてきた。ここではまず、昭和になつて出版された伝記
を二点紹介してみよう。瀬川秀雄「毛利元就」(昭和十七年刊)

元就が臨終三子を病床に招き、弓矢を折らせて、三子が協力一致
して毛利家の為尽力することが、結局三家永統の基である旨を
訓誡したという説話は、冷ねく人口に膾炙するところで、其出典
の最も古いものは、前橋旧蔵聞書であるやうに思はれる。
と書き、この「前橋旧蔵聞書」という書物を引用している。これにつ
いては後文でまたとり上げる。

戦後の著作として、三坂圭治「毛利元就」(昭和四一年刊)

元就の「三矢の訓」は賢明な庭訓の例として昔から有名である。
三人の子供が手に一本ずつの弓の矢をもって、老人の前に並んだ
挿絵が、小学校の修身の本に載っていた。一本ずつの矢なら簡単
に折れるが、三本まとめて束にしたら折れない。それと同じよう
に、お前ら三人が力を合わせれば、誰にも負けることはないと言
しているところの絵である。

この両著はそれぞれ水準の高いきちんとした著作であるけれども、

この話に関して言えばそれぞれ異っている。すなわち、一方では臨終の時のできごとだが、もう一方ではそうではない。出典としてあげられているものも、「前橋旧蔵聞書」と修身の教科書というのである。厳密な史料に立脚すべき歴史学の研究としては、どうもいい加減に思われるかもしれない。さらに言うると、「前橋家旧蔵聞書」にある話は三本の矢とはなっていないし、修身の教科書も、実はこの話ではないのである。手ははじめに修身の国定教科書の文章と挿絵を紹介しておく。大正七年の第三期国定教科書である。

ある時毛利元就はその子の隆元・元春・隆景の三人に一つの書きものをわたしました。その中に「三人とも毛利の家を大せつに思ひ、たがひに少しでも、へだて心をもつてはならぬ。隆元は二人の弟を愛し、元春・隆景はよく兄につかへよ。」とありました。

又隆元にべつの書きものをわたして、「あの書きものをまもりとして、家のさかえをはかれよ。」とねんごろにいたしました。それで兄弟いつしよに名を書きならべた請書を父にさし出し、「三人が共同して、御いましめをまもります。」とちかひました。

その後隆元は早く死んで、その子輝元が家をつぐことになりました



が、元春・隆景はよく元就のいましめをまもり、心を合はせて輝元をたすけたので、毛利家は長くさかえることになりました。この話は次の第四期国定教科書（昭和十一年）にもほぼ同文で収められている。これは毛利元就が三子に対して教訓状を送った話で、正しい史実に基づいたものである。三本の矢は影も形もない。

しかし教科書の類に、この矢の話が出てこないわけではない。一例を挙げれば、「小学校用 日本歴史」前編第二巻（明治二十六年）

世二伝フ、元就死スル時子弟ヲ枕元ニ呼ビ集メ一束ノ矢ヲ出ダシテ之ヲ折ラシムルニ、能ク折ル者ナカリシカバ、更ニ之ヲ解キテ一本ツツ折ラシメ、「汝等之ヲ見ヨ。カヲ合ハスレバ折レ難ク、離ルレバ折レ易シ。吾レ死ナン後汝等心ヲ一ツニシカヲ合ハセヨ。」ト云ヒシトゾ。

ここには人数の限定はないものの、確かに矢を用いた教訓がでている。ところで「世二伝フ……ト云ヒシトゾ」という書き方は、実はこの教科書の編者が、この話が史実でないことを承知していることを暗示するように思われる。明治の中頃まではこのような逸話を使用するのにさほど抵抗がなかったらしく、同じ時期に二、三この話を引いた教科書がある。けれども、国定教科書の段階になり、材料の吟味がきびしくなるにつれて、このような教材は姿を消し、史実にのっとった元就の教訓状の話にさしかえられたのであろう。

というのはここまでに引用した、元就臨終の教訓については、とうに、瀬川秀雄による伝記で、それが史実でないことが証明されている

のである。伝記の出版は昭和十七年だが、この部分の考証は早く明治三十七年頃公にされたものである。かいつまんで言うと、元就臨終に毛利隆元、吉川元春、小早川隆景の三人を招くことは不可能である。

長男の隆元は、父元就より九年前に死去している。また、毛利関係の正史類にも、臨終に遺訓を垂れたなどということは記載がない。この二点を指摘したことによって、もう論証はつきっている。つまり三本の矢の話というのは見えすいた作り話であるというのがはつきりしているので、まともな歴史学者は、その出典を明らかにしようという気も起きない程度の代物なのである。ただ三本の矢というような末流の話になる一步手前の段階、つまり臨終に諸子を集めるという話は、何時ごろ毛利元就に附会されたのであろうか。これについても瀬川秀雄はくわしく考証している。

さきに引用した通り、「前橋旧蔵聞書」という書物に、この話があるのである。この書は現在内閣文庫に所蔵されており、書写年代は江戸後期から末期のものと思われるが、成立はもつとさかのぼり、享保から元文ごろかとされる。

毛利大江元就死ニ臨ンデ子トモ大勢アリシヲ、暇乞ニ不残喚集、ソノ子ノ数ホト矢ヲ取寄テ、一本ツ、ヲレハ無子細ラル、モノ也。

此矢ヲ一ツニシテ折レハ、ホソキ物モ不折モノ也、各一味同心ノ思ヲナシテ、親ヲ親トスルニアリヌベシト遺言ス、時ニ隆景カ云ク、何事モ皆欲ヨリ出ル事ナレハ、欲ヲ棄テ義ヲ專ニ守リ申サハ、兄弟ノ中和ナル事ハ有間布ト、答ヘケレハ、元就大ニ感シテ、

毛利元就の三本の矢の話（岩下紀之）

各隆景ガ云処ニシタカヒ候ヘシト、被申ケルト也

これが先に引いた歴史の教科書の種本になっていることは明らかであらう。

考証はさらに進められ、次に大槻磐溪の「近古史談」を引用して論じている。大概は幕末の学者で「近古史談」は元治元年に出版されている。

芸侯戒諸子

元龜二年六月、芸侯元就病將レ死、致ニ諸子於レ前、呼ニ取箭數条一、一如ニ其子之數一、乃手自糾為ニ束一極力折レ之、不レ能レ断也。単抽ニ其一条一随折随断、因戒曰、兄弟猶ニ此箭一也、和則相依濟レ事、不レ和則各人各敗、汝等銘レ心勿レ忘、次子隆景進曰、夫兄弟之爭必起レ於レ欲、棄レ欲思レ義何不和之有、元就悦以為レ然、願ニ余子一曰、宜レ從ニ仲兄之言一

又曰

崔鴻西秦録云、吐谷渾阿柴臨レ卒呼ニ子弟一謂曰、汝等各奉ニ我一隻箭一、俄而命ニ母弟慕延一曰、取ニ汝一隻箭一折レ之、又曰、汝取ニ二十九隻箭一折レ之、延不レ能レ折也、柴曰、汝曹知ニ單者易レ折衆則難一レ摧、戮レ力一レ心、然後社稷可レ固、言終而卒、是与ニ芸侯事一、太相類、盖暗合也、記以資ニ博雅一、

ここまで引用し、結論を次のように述べている。

私は不幸にして未だ西秦録といふ書物を一見する機会に接しないが、北史列伝の第八十四吐谷渾と、魏書列伝第八十九吐谷渾の条

に拠れば、大槻氏の引用せられた西秦録中の阿豺は阿豺の誤、慕延は慕利延の誤であるやうに思はれる。而して大槻氏が如何なる根拠によつて、元就の弓矢に関する説話と吐谷渾の伝説とが其内容を一にしてゐて、全く東西の暗合であると唱へられたかは不明である。然し大槻氏の本書の記事が後年各種の修身書に採用せられた為に、其説話は弘く諸方に流布するに至つたことだけは明白な事実である。

元来元就は弓矢に関する説話よりも、猶一層内容の充実した立派な教訓状があつたから、之を通俗的にして、一般民衆に面白く且了解し易くする為に特に支那の吐谷渾の弓矢に関する伝説を元就の話として故意に作成したものであつて、東西の暗合では無いやうに思はれる。

と論じられている。この教訓話の出所、尾ひれのつきかたの道すがら明らかになつてゐる。すなわち、毛利元就が子供達に教訓状を送り、その教訓状は子孫が現代まで守り伝えてゐる。この史実が核となり、江戸中期に誰かが吐谷渾の故事を持ってきて脚色したのである。最後に、話をもつと面白くするために毛利両川の子供、隆元、元春、隆景の三人というように作り変えられたのだが、ここまで来ると、史実では有り得ない話になつてしまひ、すっかり馬脚をあらわしてしまつたのである。

以上は歴史学者からみた矢の教訓話の考証であり、その立場からすれば、毛利元就その人と関わりのないことを論証することによつて、

目的は達せられてゐるのである。

二

もう一つの研究は、説話そのものについての調査であり、これと似た話はまだ他にもあるのである。明治時代に西洋文学が本格的に紹介されるようになり、また中国関係の書物もより一層広い範囲の作品が読まれるようになってきて、毛利元就の話と類似したものがいくつか発見された。この節では、そのうちの二つ、「モンゴル秘史」と「イソップ寓話」を見ておこう。いずれも明治時代に注目され論じられてゐるのである。

まず「モンゴル秘史」を引いてみよう。

春の一日、乾した羊肉を煮て、ベルグヌテイ、ブグヌテイ、ブグウ・カタギ、ブカトウ・サルジ、ポドンチャル・ムンカク、これら五人の子供を並べて坐らせ、「一本ずつ矢を折つてごらん」と言つて与えた。一本ずつの矢などどうしてそのまましておかれよう。たちどころに折つてしまつた。又、五本の矢をいっしょに束ねて「折つてごらん」と言つて渡した。五人で五本束ねた矢を一人ごとに取つて回したが、今度はだれも折ることができなかつた。

(中略)

又、アラン・コアが五人の子供に教えさとして言うには、「お前たち五人の子供は私の一つのお腹から生まれたのですよ。ただい

まの五本の矢のように、ひとりびとりになるなら、あの一本の矢のようにだれにでもたやすく折られてしまいますよ、お前たちは。あの束ねた矢のように、ともに一つに和らぎ合うなら、だれにもたやすくどうして折られてしまうのですか、お前たちは」と言った。そのうちに彼らの母のアラン・コアは亡くなった。

（東洋文庫163「モンゴル秘史1」村上正二訳）

親が子供に対し矢を折らせて教訓する。しかも子供の数と矢の数が等しい。さらに親の死去の記事がある。この話が毛利元就の話と類似していることは否定すべくもない。

ここに登場したアラン・コアはテムジン・ジンギス・カンの十一代前の先祖にあたる女性である。彼女は夫ドブン・メルゲンとのあいだにベルグヌテイ、ブグヌテイの二人をもうけた。ところが夫の死後さらに三人の子供を生んだので、先の二人は子供の父親についてあれこれ言った。そこで、彼女はこのたとえ話をし、実は夜ごとに「光る黄色の人」が私のお腹をさすり、その光はお腹の中にしみ通って行った。だからかの人（天御子）なのだと言るのである。すなわちアラン・コアは神話の太古の人物、歴史的には実在の疑わしい人物としなければならぬであろう。ただおよその目安として、仮に十一代の祖先という世代数を一代三十年というような計算をすると、ジンギス・カンよりはるか昔約三百年ほど昔の人物となろうか。

この「モンゴル秘史」という書物は、朝廷に深く蔵せられていたのを元朝滅亡の際に明政府が入手したもので、世間に流布はしなかった。

また文章も原文のモンゴル文に、対訳として俗語の中国語が附載されているという体裁で、普通の漢文の知識では歯が立たない。こうしたわけで、江戸時代の日本にその影響が及ぶことは考える必要がないであろう。けれども明治になって、秘史が日本語訳されるとすぐに、この話が毛利元就の話と関係づけられ、いろいろな研究が発表されているのである。

手はじめに、訳者村上正二氏の訳注を引いておこう。

これとほとんど同じ内容の話が、チンギス・カンとその息子たちの間で取り交されたこととして、当時のイスラム史家のジュワイニーはその著書『世界征服者の歴史』の中に二度も繰り返して述べており、ラシードも又それをそのまま引用している。（中略）特に矢をたばねて部族の統一を誓う風習は、ほとんど全世界に広まっている古い民間説話で、西欧ではイソップの「狩人と四人の息子」、イスラム世界ではタバリーのウマイヤ朝の名将ムハッラムの話、北アジアでは『魏書』卷一〇一「吐谷渾伝」及び『北史』卷九六「吐谷渾伝」に、首長阿豺の話があり、又わが国では、やはりイソップ物語の影響を受けた毛利元就の話が特に著名である。

ここでとり上げられたイスラム史料については、容易に入手できる和訳が見あたらないので、一まずさしおくことにする。『魏書』「北史」という二つの正史については前節で言及した。なお瀬川、村上両氏で、巻数表示がくい違っているように見えるが、瀬川氏は列伝第八十九と

いうこと、村上氏は本紀列伝の通算で一〇一卷というように示したので、両氏ともに原典にあたっておられることは明らかである。さてここに、「イソップの影響下の毛利元就説話」という題材があらわれてきたのであり、これを節を改めて考えてみたい。

三

イソップ寓話は岩波文庫に原典からの訳がある。その八六番は次の通りである。

「或る百姓の息子たちがよく兄弟喧嘩をやりました。彼はいろいろと言って聞かせましたが、言葉で説いたのでは、彼らをどうしても改めさせることができないので、事実によつてこれをやらなければならぬとさとりました。そこで彼は息子たちに薪の束を持つてくるように言いつけました。彼らが言われたことをしましたので、まず彼らに薪を束ねたままで渡して、それを折つてみよと命じました。彼らがどれほど力を出してみても、折ることができませんでしたから、次に彼は束をほどこいて彼らに一本ずつ与えました。彼らがそれをやすやすと折りましたので、彼は言いました。「いいかね、倅たち、お前たちも、もし心を合わせていけば、決して敵に負けることはないだろう。しかし喧嘩をしていれば、直ぐにやつつけられるだろう。」

この話は、不和は人に打ち負かされ易くするが、一致は逆に力

強くするものだ、ということを明らかにしています。

(山本光雄訳)

この話も、見る通り、毛利元就の矢の教訓と類似している。すでに明治時代にこの二つの話の類似が注目され、イソップの話が毛利元就の話の原典ではないかという説が出ているのである。

ところでイソップ寓話の成立については、後述することとし、日本への伝来についてここで確認しておこう。キリシタンの印刷物のなかに「イソポのハブラス」というイソップの翻訳がある。ローマ字書きの日本語で文禄二年(一五九三)の成立であり、大英博物館に一本が蔵せられている。このローマ字本は流布はしなかったけれども、この百姓の話は確かに含まれているのである。近世初期になると「伊曾保物語」という仮名草子が出版され、これは広く読まれたものであるが、残念ながら、この話は含まれていない。こうなつてくると、元就の話は江戸中期以降に作られたのが明らかであるので、イソップにもとづいたとする説はやや不利になるかもしれない。ただ毛利元就の旧主である大内氏は山口に本拠地があり、しかもこの地はフランススコ・ザビエルの伝道の拠点でもあったから、わずかに両者の接点はあるとは言えよう。

さて、このあたりのことは、中公新書「イソップ寓話——その伝承と変容」という小堀桂一郎氏の著書があつて、毛利元就とイソップ物語についての明治時代の論文として、南方熊楠と新村出のものを紹介しておられる。

まず南方の説をとりあげると、毛利元就とキリシタンが必ずしも関係がなくはないとしたあと、

同じモテイフの話はリンゼイの『スコットランド史』のケンネジー僧正のゼームス二世への教訓、ハイトンの『東国史』の成吉思汗の条にあり、バートン版の『アラビア夜話』の補遺の部にも見え、「賢愚因縁経」や「雑宝蔵経」に似たような話がある。大槻磐溪も『近古史談』で崔鴻の『西秦録』に出ている吐谷渾の阿柴の逸話を紹介している一等と列記し、棒折りの教訓はイソップから毛利元就へという伝播経路よりも、要するに元就・隆景等戦国武士の逸話を蒐めた編纂者が漢籍から抄して作ったか、または諸方でおのおのが個別独立に発生してもおかしくはない、誰でも案出しそうな話なのだ、という。

右は小堀氏の要約を引いたのだが、南方の博引旁証は大変なものである。ただ一寸立ち止まって考えてみると、引かれた例は、ケンネジー僧正が西洋の教養人であるからには、イソップを知っていてその状況に応用したのではないか、成吉思汗の話は、「モンゴル秘史」ですで見たとように、アラン・コアの話がより有名な人物に適用されたのではないか、というように、必ずしも一次的な資料とは言にくいものもある。仏典の指摘はまた驚くべき博識であるが、現代では「大正大蔵経」で簡単に原文を見ることができる。「賢愚因縁経」巻第十二、波婆離品第五十¹⁾

時間浮提、有二大國。名二波羅奈²⁾。爾時國中、有二薩薄³⁾。

毛利元就の三本の矢の話（岩下紀之）

家居巨富。無^レ所^二乏少^一。有^二男兒^一。各皆端正。長名^二涙吒^一。小字^二阿涙吒^一。父垂^二命終^一、告^二勅^三子^一。我必不^レ免。当^レ即^二後世^一。汝等兄弟、念相承奉、合^レ心并^レ力、慎勿^二分居^一。所^二以然^一者、譬如下^一糸、不^レ任^レ繫^レ象、合^二集多糸^一、乃能制^レ象。譬如下^一葦、不^レ能^二独燃^一、合^二捉一把^一、燃不^レ可^レ滅。今汝兄弟、亦復如^レ是。共相依恃、外人不^レ壞、内穆^レ家則財業日增。嗚^レ誠之後、氣絶命終。

南方の引いたもう一つの「雑宝蔵経」も、ほぼ同様の話である。命を終わろうとする父親が、子供たちに訓誡する点は、たしかに共通している。しかしここで「一糸」「一葦」は譬えとして出されているのであり、実際に子供たちに持つてこさせて折らせるといっているのではない。また譬えであるから、糸でも葦でも、何にでも変更がきくのであるが、元就のほうの矢は、他の品物に取り更えはきかないのである。それは、武器は戦士にとって特別なものだからであって、「魏書」「モンゴル秘史」と、毛利元就の話はどうも深い結びつきがあるように思われてくるのである。

新村出の説はアカデミックで手がたい調査に基づき、明治四十四年の学説でありながら本稿でこれまで論じてきたことの総括の感がある。イソップの話と毛利元就の矢の話をつなげることを困難と断じた後、「西秦録」についてこう論ずる。

「西秦録」は「十六国春秋」の中の一であるが、元来「十六国春秋」編述の時代には疑が存する。漢魏叢書本に由て「西秦録」を閲す

るに、阿柴の訓言は見えぬし、他の一本にも欠けてゐる。或は「太平御覽」(卷三四九兵部八〇箭上) 所引のものに拠つて、芸侯諸子を戒める話を組立てたのかも知れぬ。同じ話は「魏書」にも見え、更に之より出て「北史」にも載つてゐる。

この論は、すでに前に引いた瀬川秀雄の考証をふまえてのものであるが、「西秦録」にもとづくというのは疑わしく、同じ話は「魏書」「北史」にもあるという。「魏書」「北史」は中国歴代の正史「二十四史」に含まれる歴史書で、王朝の史官の命がけのいとなみであり、記事の信頼性もかなり正確なものと見ることが出来る。ただこの場合は、吐谷渾という異民族についての記録であるから、例えて言うると、邪馬台国や卑弥呼に関する「三国志」の確度などに類似している。阿豺の記事のあたりには、晋の年号「義熙」、宋の年号「元嘉」があらわれ、いずれも五世紀前半の年号であるから、この人物の生存年代は確定するのである。

なお、江戸時代の中期頃、毛利元就の遺誠の話を造作した人物は、阿豺の話をもどく書物で読んだのであろうか。新村は「西秦録」が「十六国春秋」の一部をなす書物で、かつ現行の漢魏叢書本にも、他の一本にも、この話が見えないことを確認している。さらに「太平御覽」所引の文によつたかもしれないとの推定を下しているのである。ただこの無名の造作者は、種本について何も語らず、吐谷渾の人名をも引いていないので、どちらとも決めかねる。しかし、大槻磐溪の考証となると、もう少し限定することができよう。

「十六国春秋」はそもそも佚書であり現行のものは漢魏叢書本をはじめ輯佚本である。したがつて「西秦録」も本来の書から引用することはできないはずなのである。とすれば何らかの孫引をしたか、「魏書」「北史」からの引用を、もつともらしく「西秦録」という書名に改竄したことになるのだが、そんな手間をかけて何か利益があるとも思えない。孫引するとなると、「太平御覽」を引いた可能性は充分にあるだろう。今問題にしている文は、「太平御覽」の文と、「近古史談」とがほとんど一致し、特に人名を阿柴、慕延とするのが共通する。これに対し、正史の「魏書」「北史」では、阿豺、慕利延としているのであつて、大槻は正史の方を引いてのではない。このように類書によつて故事を探ることは漢文に習熟していた江戸の知識人にとつて、いかにもありそうなことである。

なお幕末の日本人に親しまれた類書としては、「淵鑑類函」があるが、その卷二二六矢三の「奉一」なる見出しのところに、「太平御覽」と全く同文でこの阿柴の話が見える。「崔鴻三十国春秋西秦録曰」として始まり、この三十国春秋という書名は十六国春秋の誤りと思われるにもかかわらず、「太平御覽」と同形であるので「淵鑑類函」が「西秦録」の原典を見ておらず、「御覽」を孫引していることは明らかである。そこで大槻がこの二つの類書のどちらかを利用して、「近古史談」の考証をなしたと推定しておきたい。

吐谷渾は南北朝時代には中国の西辺に拠つたが、本、遼東鮮卑から出たとすると、箭の喩言は此故地から伝へた話とも見られる。

西紀第六世紀の中期に当る阿柴の時代から尚數世紀を経て、蒙古の名媛阿蘭が李端察兒を始め其五子に向つて、臨終の際にやはり箭の喩言を以て和合を諭すことが「元朝秘史」巻一に見える。吐谷渾での話と蒙古での話とは父と母との差、子ども数の数が二十人と五人との違ひで、共に臨終に當つての訓言であり、精神は全く同一であるから、同一根原の喩言であることは疑ひない。而して吐谷渾の故地も蒙古も中国からの方角は略々同一であるから、説話の由来は中国の北部又は東北部に出たと見做される。但し一方の話は他方より書物上で借りたものではなくて、寧ろ口碑上で伝へたやうに見える。自分の予想では、更に西の方の民族から得た喩言ではあるまいかと思ふが、それは今後の研究で段々明らかになつて来るだらう。

伊曾保喩言にある細枝の束を以て訓へた農夫の話の出典はいづれにあるか、未だ不明であるが、箭の束の譬喩譚に縁を引かぬことは無からうと考へる。それを調べると、東西説話喩言の連鎖を攻究する上に良い手掛りを得るに違ひない。

長い引用になつたが、新村はこの段階ですでに「魏書」と「モンゴル秘史」の共通話に着目し、さらにイソップとのつながりを考えていたのであつて、流石と言わねばならない。ただ考証の内容についてはいかがであろう。なるほど吐谷渾の出自については、「魏書」の吐谷渾伝冒頭に「本遼東鮮卑徒河涉婦子也」とあつて、もともとそちらに居たのであろう。けれども阿豺の時代には、中国西北部、今の青海省辺

毛利元就の三本の矢の話（岩下紀之）

に居住したと思われ、先に述べたように、五世紀義熙・元嘉頃のことであつた。新村が六世紀云々というのは単純な誤記であろう。モンゴル族はそれよりはるか後代に、より東方にあつたのであるから、説話の伝播としては逆に西から東へと考えるべきであらう。

四

イソップの寓話は、きわめて複雑な伝承過程を経て今日の形になっている。紀元前六世紀のギリシャ人アイソポスが、賢者としていろいろのたとえ話をしたこと、古典時代にすでにアイソポスの寓話が広まっていたことは疑いない。けれども現存のイソップ寓話のうちどの話がアイソポスその人にさかのぼりうるかは到底確言することはできない。古代人にとつては、これらの話は演説するとき使用すべき手ごろな材料にすぎず、それ自体が文学として重んじられるわけではなかつた。それで、散文で書かれた寓話集は、さきの岩波文庫の底本となつたもので、現在まで伝わつてはいるものの、古代ではあまり広く読まれていたわけではない。詩人が寓話集を韻文化した場合は、その詩人の作品として享受されこちらのほうが、愛読されてきた。このようにして、二千年以上にわたり、ギリシャ語、ラテン語による韻文、散文の形で、あるいは改作され、あるいは翻訳されながら、内容を増加させつつ伝わってきたのが、現存のイソップ寓話集なのである。メソポタミア関係の資料の解説が進み、オリエント起源の伝承が含ま

れていることも確認されている。

本稿の主題である「百姓と子供」の話は、何時ごろから確認されるかという点、紀元一世紀に生存したバブリオスという詩人による詩にすでにある。このバブリオスは、イソップ寓話の諸伝承のうちでも最も古いギリシャ語版ということになる。ところで、一連の矢の教訓話をとりあげて、さきのイソップの話に目を転ずると、似かよった話であることは違いないが、細部はいろいろと相違していた。主要な点は、矢に対して薪の束というのであって、随分に卑近な材料と思われる。さらに父親はすぐに死ぬのでもなく、場面としての緊張感も異なっている。ところがバブリオスによるこの話は次の通りである。日本語訳がないので私訳をかかげておく。

昔大そう年とった人がいて、

子供が大ぜいありました。

もう命が終りそうになった時、

どこかに細い棒のたばがあつたら

持つてくるよう命じました。

たばを持つてくると、

「子供たちよ、全力を出して棒のたばをたばねたままで折つてみ

よ」

誰も折ることはできません。「それでは一本ずつで

やってみよ。」それでどの棒も簡単に折れた時

彼は言いました。「子供たちよ、お前たちがみな

心一つにしているならば、誰もお前たちを、

どんな強い力によつてもそこなうことはできない。

もしお前たちお互いの心がはなれていれば、

それぞれがこの一本の棒のようになってしまふ。」

(Loeb Classical Library 436, 62p)

見るように岩波文庫版との重要な相違点がある。まず教訓を与える人物は百姓ではなく大そう年とった人⁷である。このことは、かかる寓話の主人公は、割合自由に改変されて、その読者に親しみやすくされるということの意味するのである。次に、ここでは命が終る時、臨終の遺言であることが明記されている。この条件のあることによつて、バブリオス版の寓話は、はっきり毛利元就の説話に近づいてくる。ところで、ここに棒と訳した語は、原語で *“Pagon”* ラブドス⁸というのであるが、基本的には、木製の棒状のものを意味する。用例を当てるみると、中々に興味深い例がでてくる。

古くホメロスの「イーリアス」二十四卷三四三—三四四にこうある⁸。

(ヘルメスは) その上に杖をとつたが、これは、好き勝手な人間の目をまどわし(て眠らせ)たり、また逆に、眠っているのを覚まさせたりする道具である。

(世界古典文学全集「ホメロス」呉茂一訳)

オリュンポスの十二神の一であるところのヘルメス神の持ち物「杖」が、このラブドスであり、その霊力はここにある通りである。「オデュッセイア」の次の例になると、さらにすさまじい威力を発揮する。(第

かれらが飲みほすと、女神はすぐさま杖で彼らを打ち、豚の囲いに入れた。かれらの頭や声や毛や姿は豚だったが、心は以前と同じくそのままだった。

(同書 高津春繁訳)

女神はキルケーで、彼女の住む島へオデュッセウスと部下たちが漂着するが、この場面で部下たちは豚に姿を変えられてしまう。その時の杖もまた、ラブドスなのである。

バブリオスと同じヘレニズム時代の例として、七十人訳聖書を考えてみても、同じく霊力を持ったラブドスを引用することができる。「出エジプト記」四章二節―五節¹⁰⁾

主は彼に言われた、「あなたの手にあるそれは何か」。彼は言った、「つえです」。また言われた、「それを地に投げなさい」。彼がそれを地に投げると、へびになったので、モーセはその前から身を避けた。主はモーセに言われた、「あなたの手を伸ばして、その尾を取りなさい。――そこで手を伸ばしてそれを取ると、手のなかでつえとなった。

(日本聖書協会訳)

この畏るべきつえも、ギリシャ語でラブドスと訳されているのである。イソップの寓話は、主人公などは変えられて百姓、動物などになってよいとすると、持ち物のラブドスは、それぞれの持ち主によって様相を変容させてゆく可能性がある。すなわち、ラブドスを持つ人が百

毛利元就の三本の矢の話 (岩下紀之)

姓であれば、これは単なる棒にすぎないけれども、この棒は持ち主だけで畏るべき呪力を発し得るのである。ここにおいても、矢が戦士にとって特別の霊力をそなえていたために、一連の阿豺、アラン・コア夫人というような人々に使用されたことと関連性が浮んでくると思われる。要するにバブリオスの段階でのこの話は、毛利元就の話に一層近づいてくるのである。

五

最近公刊されたプルタルコス「饒舌について」から一文を引用してみよう。

スキュティア人の王スキルロスは八〇人の息子を遺したが、死に臨んで、槍を束ねて持ってこいと言ひ、息子たちにこの槍を束のまま折れと命じた。息子たちがあきらめると、王自身が槍を一本一本引き抜いて、やすやすと全部折ってしまった。こうして王は、息子たちが互いに協調し一致すれば強く不敗たり得るが、ばらばらになれば弱く不安定だということを知らしめたのである。

(岩波文庫、柳沼重剛訳)

これも毛利元就の矢の話とよく似ている。現に訳者の柳沼氏は訳注で元就のことに言及している。槍を折るといふことは我々から見ると随分妙な話で、一本でも容易に折れそうもない。しかし古代ギリシャでは、槍はまず第一に投げる物、飛道具であった。「イーリアス」の戦

闘場面にいくらでも出てくるが、一例を引いておこう。第五卷六一—テラモーンの子の大アイアースが憐れと思つて、すぐそのかたわらにいつて立ち添い、輝く槍を投げつけて、セラゴスの息子アンピオスに打ち当てた。

したがつて、加藤清正の槍とは違って、軽く、そしておそらくは折れやすかつたのであろう。

さてここに言うスキュティア人については、ヘロドトスの「歴史」第四卷の全部が、この民族の記述にあてられている。だいたい黒海の北方に居住する騎馬民族で、ベルシヤ人ともギリシヤ人とも接触があつたようである。ここに出てくるスキルロスなる王は、ストラボンの地理書七・四・三に記事がある。それによると「ポントスの王ミトリダテスが、黒海北岸の都市ケルソネソスの保護者となつた時、スキルロスならびにその子供たちと戦鬪をまじえた。そして、スキルロスの子供たちというのは、ポセイドニオスによれば五〇人、アポロニデスによれば八〇人あつた」といのである。このプルタルコスとの伝承と八〇人の子供という数が一致するので、この二つの資料に出て来るスキルロスは同一人物ということになる。ミトリダテス王は著名な人物で、生存年代は紀元前一二〇一—六三年と判明しており、ローマの將軍ポンペイウスと戦つた人である。とすれば、これと交戦したスキルロスも前一世紀前半の人であり、今までに引用したさまざまの人々のうちで最古の人物である。この話を伝えたプルタルコスはトラヤヌス帝頃に生存して、一、二世紀の人である。

スキルロスの逸話によつて、本稿の結論を出すことができるようである。イソップとスキルロスの間にかのつながりがあるかどうかを証明することは不可能である。けれども、スキュティア人とギリシヤ人とは隣り合つており、この二つの話を書き残した、バブリオスとプルタルコスは共に一、二世紀のギリシヤ語圏に属する知識人である。両話を結びつけて考えることは実に魅力的なことである。

一方スキュティア人が北方の遊牧騎馬民族であり、中央アジアを疾駆していたことを念頭においてみる。すると、ユーラシア大陸の中央乾燥地帯はあの広大な空間にもかかわらず、常に交通路が開けていたことをすぐに思い出すのである。中国史料にあらわれる匈奴が、ヨーロッパに出現したフン族と関係があるのかどうか。このような学説の存在自体、交通路の連続性を証明するものである。数多くのトルコ系民族の分布、仏教・イスラム教の伝播、こういう道をこの話も通つていったことが考えられないだろうか。前一世紀のスキュティアの話、五世紀の吐谷渾の話、また後のモンゴルの話、これらはいずれもある個人の遺言という形をとつている。主人公と、話を書きとめた記者との距離がかなり遠いことまでも似かよつてゐる。スキルロスとプルタルコス、阿豺と「魏書」の撰者、アラン・コアと「モンゴル秘史」、時代が百年以上も違い、民族まで異なつたりしている。

けれども、史実であるかどうかはどうでもよいことであつて、このような距離の説話の伝播の可能性こそが興味深く思われる。英雄達は死に絶える。蓋世の英雄達であつたに違ひないスキルロス、阿豺等を、

今知る人があろうか。しかし、靈力のある武器に託して遺誠を述べるという説話は、主人公を取り変えながら生き残ったのである。一方イソップの寓話は、それ自体の伝承の過程で自らを変形しつつ、百姓と子供、という形で固定した。けれども、その原型は、より毛利元就の説話に近いものであったと思われる。その段階でスキュティア人スキロスの話との関連があるいはあったかもしれない。それはそれとして、キリシタンの活躍した時代に、ポルトガル・スペインの宣教師たちによって海路はるばる日本に運ばれ、そのみならず、日本語にまで翻訳されたことは、まことに興味深い。同じ話が、一方は陸路を通り、もう一方は海路を運ばれ、極東のこの日本の地において毛利元就の話として脚色され、誰もが知っている教訓話となったとする想定には、胸を躍らせるものがある。

注

- (1) 小学中等科読本巻ノ一(明治十六年) 帝国読本巻之五(明治二十六年)等に見える。
- (2) 新村出「文祿旧訳伊曾保物語」附録(新村出全集第七巻所収)に引く、辻善之助の指示。
- (3) 引用文は中公新書「イソップ寓話」193ページから194ページ。南方の原文は「南方熊楠全集3」所収。論文名「『大日本時代史』に載する古話三則」
- (4) 「大正大藏経」第四巻本縁部下、433ページ下欄。なお次に言う「雑宝藏経」も同巻470ページ下欄に当該文あり。
- (5) 注(2)に同じ。この引用文は301ページ。

毛利元就の三本の矢の話(岩下紀之)

(6) 「太平御覽」明萬曆元年刊本は、「十六国春秋」と改訂している。現代の、宋刊本に基づく影印本は「三十国春秋」で、「淵鑑類函」は宋刊本を利用したのであろう。

(7) 原文は

ἀντὶ ὑπερηφάνου

(8) 原文は

εἶπετο δὲ ὑάβδων, τῆ τῶνδῶν ὀμμετα θέλγει

ὄν ἐθέλει, τοὺς δὲ ὑβρε καὶ ὑπνώοντα ἐπέγει

(9) 原文は

Αὐτὰρ ἐπεὶ δόκεν τε καὶ ἔκρινεν, ἀντίκ' ἔπειτα

ὑάβδω κερτανήνυα κατὰ θυμῶσιν ἔειπεν.

Οἱ δὲ θυῶν μὲν ἔχον κερταλάς φωνήν τε τῶντας τε

καὶ δέμας, αὐτὰρ τοὺς ἦν ἑμπεδος ὡς τὸ πάρος ποῦ.

(10) 一節と四節の原文は

“εἶπεν δὲ αὐτῷ κύριος Τὶ τοῦτό ἐστιν τὸ ἐν τῆ χειρὶ σου; ὁ δὲ εἶπεν

“πάβδος.” “καὶ εἶπεν κύριος πρὸς Μανδῆν “Ἐκρινον τὴν χεῖρα καὶ

ἐντάλαβόν τῆς κέρονυ ἐκρίνας ὄν τὴν χεῖρα ἐτελέβετο τῆς κέρονυ, καὶ

εἶπετο ὑάβδος ἐν τῆ χειρὶ αὐτοῦ.”

なお他に「詩篇」一三篇四節と四五篇六節参照。